

様式3

平成18年度 傾斜的研究費(特定)(全学分)(戦略分・公募分)研究報告書

研究課題名	情報システムの失敗・成功の研究とそのPBL教材化	
研究者または研究代表者名	所属部局名	職位
戸沢義夫	情報アーキテクチャ専攻	教授
研究分担者名	部局名・所属研究機関名	職位
酒森潔	情報アーキテクチャ専攻	教授
南波幸雄	情報アーキテクチャ専攻	教授
研究実績の概要 (600～800字で記入。図、グラフ等は記載しないこと。)		
<p>情報システムプロジェクトの失敗例については、雑誌やセミナーなどで紹介されている。実際には、このような形で紹介されているのは氷山の一角であり、企業や組織の中で秘匿されているケースが数多くある。本研究では、これらの隠れた事例を掘り起こし、その原因・特質に応じて整理・分類し、一般化した上で、社会の共通財産としてのノウハウとして共有することを目的とする。併せてその内容を再編集して、PBL(Project Based Learning)の教材化し、情報アーキテクトの育成に活用することを目指す。</p> <p>大学院修士(専門職修士)レベルで、修士論文に代わるものとして PBL を位置づけている大学は国内にはないため、すべてが手探りの状態での出発した。他大学では、個々の教授が担当科目のひとつとして PBL を導入しているケースがあり、代表的な例として、慶応大学の岩大教授の方法をスタディした。また、大学レベルで組織的にプロジェクトを実施するグループ学習を取り入れている大学として、はこだて未来大学がある。はこだて未来大学は大学3年生が対象である。はこだて未来大学のPBLは、文科省の現代GP(Good Practice)でも高く評価された。はこだて未来大学での経験、グループ学習を成功させる秘訣をいろいろ調査した。また、PBLを受講する学生の9割以上が社会人であることから、社会人を対象に教育している専門職大学院として山口大学MOTを調査対象に加えた。</p> <p>修士レベルのPBLであること、担当する教員が10名と多いこと、PBLで教育しようとする内容も教員、学生の期待も幅広いことを考慮すると、PBLでの教育水準がプロジェクトごとにバラバラになることが心配される。専門職修士の終了生レベルを一定に保つことは極めて重要であり、そのために、全教員が出席するPBL検討会を何度か開催して教員間のコンセンサス作りを実施した。</p> <p>終了生レベルを一定に保つために、学生の評価をどのように行うかは重要なテーマである。PBL先進国(オランダ、デンマーク)でどのように学生評価を行っているかを調査した。その結果わかったことは、学生が学んだこと、自分のやった成果を教員にわかるように報告するのは、学生の責任であることを明確化している点である。学生の提出物、それに対する教員の評価の方法が標準化され、きちんとシステムで管理されていることが重要である。本学では、週報、Self Assessmentを全プロジェクトで共通管理にするため、PBL委員会で基本フォームを定め学生に周知することにした。</p> <p>PBL受講の前提知識になるような項目は、IDG Japan社の雑誌「ITアーキテクト」に執筆することとし、Vol.9, Vol.10では本学教員による特集記事が編纂され出版された。</p>		

様式3

研究発表 [雑誌論文発表、図書、学会発表等]			
著者 (講演者)	論文題目 (発表題目)	発表誌 (発表大会名)	年月
戸沢義夫	概念データモデリング	ITアーキテクト Vol.9	2007年1月
南波幸雄, 戸沢義夫, 酒森潔、他	インフラ知識大全	ITアーキテクト Vol.10	2007年3月
南波幸雄	企業インフラの構成とアーキテ クトが押さえるべきポイント	ITアーキテクト Vol.10	2007年3月
森本祥一, 戸沢義夫	データベース編	ITアーキテクト Vol.10	2007年3月
酒森潔, 長尾雄行	運用/管理編	ITアーキテクト Vol.10	2007年3月
南波幸雄	産業技術大学院大学で考えるCIO 教育	国際CIO学会 CIO教育研究会	2007年5月
戸沢義夫	ITSS-DSを活用した大学院学生ス キル診断の試み	産業技術大学院大学 紀要	2007年7月